

第5回 英語の歴史と二重語

猪浦道夫(いのうら みちお)

米国ニューポート大学日本校准教授。横浜市立大学、東京外国語大学イタリア語学科卒業後、同大学大学院修士課程修了。イタリア政府留学生としてローマ大学留学。帰国後、ボリグロット外国語研究所を主宰。著書に『語学で身を立てる』『3語で話すスペイン語』などがある。DHCカルチャーセミナーの講師としても活躍中。

英語という言葉は成り立ちが複雑で、様々な言語が入り混じっているという点で日本語と、ある種共通点があるように私は思います。地図で見ても、大雑把に言えば、逆三角形の形をしたユーラシア大陸の東西にちょこんと島国として存在しています。英語、日本語の歴史や語彙を勉強していると、言葉は悪いけれども、本当に「ユーラシア大陸の吹き溜まり」という言葉がぴったりのように思います。そして、考えてみると、文化の面でもそういう印象を強く持ちます。

さて、今回は、ルーツが同じなのに、移入されてきた「事情」が異なるために「違う単語」になっている言葉の話です。まずは入ってきた「時代」が異なるために、同じルーツでも違う単語になっている例をご紹介します。

この話に入る前に、皆さんに思い出していただきたいことがあります。それは、日本語の漢字の音読みについて習ったときの、呉音、漢音、唐宋音のことです。どうですか、覚えていますか。例えば、「行」という漢字は、呉音では「修行」のように「ぎょう」、漢音では「行為」のように「こう」、宋音では「行脚」のように「あん」と読みますが、これは基本的に、それぞれの語彙が日本にもたらされた時代の「中国語」の発音を伝えているのです。

実はこれに似たことが英語でも起きているのです。ご存知の方も多いと思いますが、英語という言葉のルーツは北部のドイツ語です。ブリテン島には古くからケルト人が住んでいましたが、ローマ帝国時代にローマ人が駐屯して彼らが引き上げた後、5世紀ごろから北ドイツから渡ってきたアングロ、サクソンなど7部族のゲルマン人が今の英国の礎を築きました(このとき辺境に追いやられたケルト人の子孫が、アイルランド、スコットランド、ウェールズ人というわけです)。

やがて9世紀ごろから、北方のゲルマン民族であるノルウェーのバイキングがこの地に来襲し、彼らとの抗争のあいだに両民族は混血していきます。このとき、アングロ・サクソン語とスカンジナビア語が入り混じり、文法的には格変化、動詞の活用などが著しく簡略化します。

さらに、英語の運命に決定的な変化をもたらしたのが、1066年に起きたノルマン人の英国征服です。このノルマン人というのは、簡単に言えば数世代前にデンマークからフランスにやってきて貴族に列せられた「バイキングの末裔」なのですが、大事なことは、この時点

ですでに「フランス人」だったということです。

当時のフランスと英国は、1000年前の中国と日本のような関係で、英国はフランスに比べ経済的にも文化的にもとるに足らない小国だったのです。そこで、文化大国から乗り込んできた時の征服者ウイリアム1世は、国家制度や国語をすべてフランス風に改めました。乱暴に言えば、この1066年から実に5世紀近く、英国の国語はフランス語だったのです。当然、おびただしい数のフランス語の語彙が英語にもたらされます。

では、この時代にフランス語からもたらされた語彙として、*candle* と *poison* という語を取り上げてみましょう。*candle* は、本を正せばラテン語の *candere* (白く輝く) という動詞の過去分詞に由来する語で、*candid* もその仲間の語です(*candid* は「白く輝く>包み隠しのない>明白な>率直な」と意味が変化していきます)。

さて、13~14世紀になりますと、フランス語に大きな発音の変化が起こりました。*ca* の綴りは「カ」から「チャ」、さらに後の時代には「シャ」と読まれるようになり、それに従って綴りも *cha* に変わります。その変化が起きて以降に移入された語彙は *chandler* (ろうそく屋)、*chandelier* (シャンデリア) と、英語でもその時代のフランス語の綴りと発音に従うようになります。つまり、*candle* と *chandelier* は、同じ「光を照らすもの」なのですが、入ってきた時代が異なるために違う語になっている、というわけです。これを二重語と言います。

一方、*poison* はもともとラテン語の *potio* (一呑み) から出た語で、「一呑み」から「毒の一呑み」という意味になり、さらに「毒」という意味が定着しました(ちなみに *potio* は *potare* という動詞に由来する語で、英語でも *potable* という語でその派生語が残っています)。しかし、18世紀のルイ王朝時代に、元のラテン語から *potion* と形を変えていたフランス語が再び英語にもたらされたときには、かつてこの単語が *poison* の語源であったことを忘れていた英国人たちは、当時のフランス語の意味である「一回の服用量」の意味で、この *potion* という単語を輸入したのです。つまり、*poison* と *potion* も二重語というわけです。

興味のある方は、この機会にぜひ英語史をかじってみてください。英語の世界がますます面白くなりますよ。

今回は、単語が入ってきた「ルート」が違うケースをみていきます。